DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

これまでのあらすじ！

ぴょーん

陰キャだった私がバンドを組んで

結束バンドとしてデビューを始めた

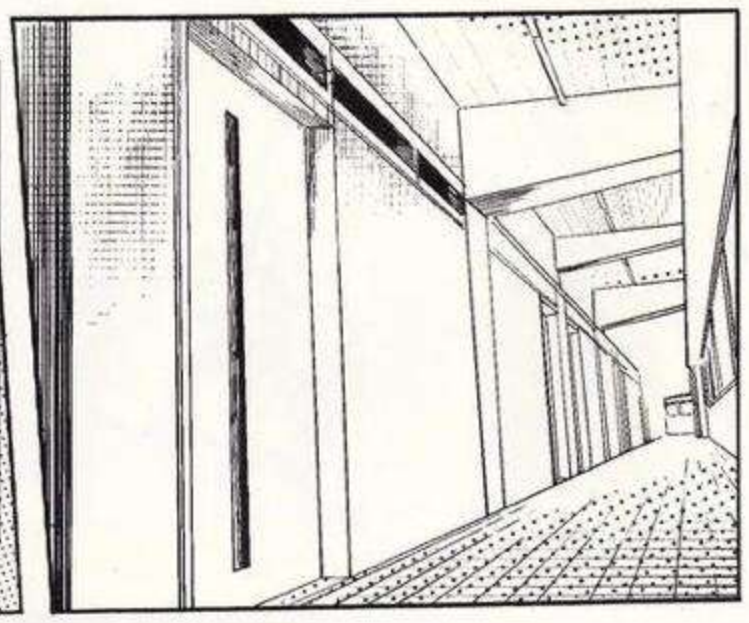
このまま順調にバンドも売れてモテちゃったりするかもしれない！

ワイ ワイ

とぼ…とぼ…

キャーッ!!! 抱いてー!!

カリスマ



でも、まさか本当に…

あの喜多ちゃんとお付き合いをして

ひとりちゃん…

しよ…？

今まさにイチャついてる最中である

学校で…

あっ♡

あっ♡

えっちするなんて
どうかしてる……

じゅぽっ♡

じゅぷっ♡

じゅるる♡

喜多ちゃん
かわいい…っ

じゅるるっ♡

じゅぽっ♡

じゅぽっ♡

じゅぽっ♡

すちゃっ♡

すちゃっ♡

私……

喜多ちゃんに弱すぎるのでは…

おはよー ございます！

お、おはよう ございます…

おぅ おはよう

じ―

？

……

私は別にぼっちのまま変わらないなら気にしないから

エッ!?

バレ…ッ

あと虹夏も気づいてると思うよ

終わった…

いや

また後で話します

どうしたの？

ええっ!?

リョウ先輩が!?

ナチュラル
お泊まり中

……んー…

やっぱり
バレちゃったかぁ

確信犯だった…

改めて
ご報告を
しなきゃね!
サプライズは
できなくて
ざーんねん!

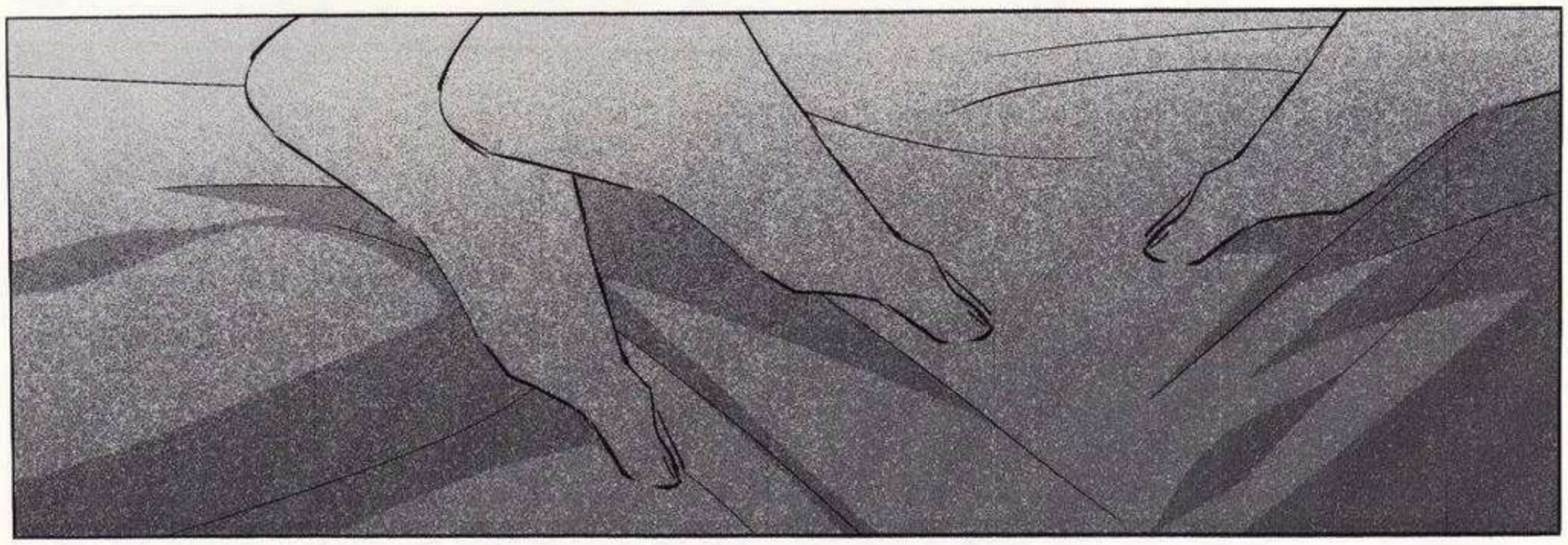
はい…

…それは
またお話を
するとして、

ギシ…

ひとりちゃん

そのままの寝るなんて寂しいわ、私



ちゅ
キスするの、気持ちいい
興奮しすぎて下半身がいたい…
ムクムク…
かわいい…
あ、その…
！
ひとりちゃん好き！
わ、わたしもすきです…！

それにしても
あれ以降積極的になってくれてよかったわ！
～前回のおもいで～
すすっすすみません！本当に！
ええっ、私こそごめんね
ゴロゴロ
あ…っ
んっ…
…っ…
ちょっ…と…
じらしてやらしい…っ

ごめんなさい
もう出…っ！♡

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ

……

ぬぽぽ

ひとりちゃんて
むっつりよね

エッ

まぁいいわ…
…今度は一緒に
気持ちよく
なってくれる？

ももっ…
勿論です！

…それと、
押入れに隠して
いるもの…
知ってるのよ

な…
なんで知……

いいから
早く出して
くれる？

はひ……

あ、あの

なんで着てるんですか…

マイ・ペクロ

ビキニ

私からもいい？

なにこれ

あぅ…

喜多ちゃんにいつか着て貰いたくてこっそり買いました…

素直でよろしい

じ

ふ～ん…

ムラ…。

うおぉ…

……

ひとりちゃんのえっち

ぐ……っ

き、喜多ちゃんがえっちすぎるのが悪いんですっ！

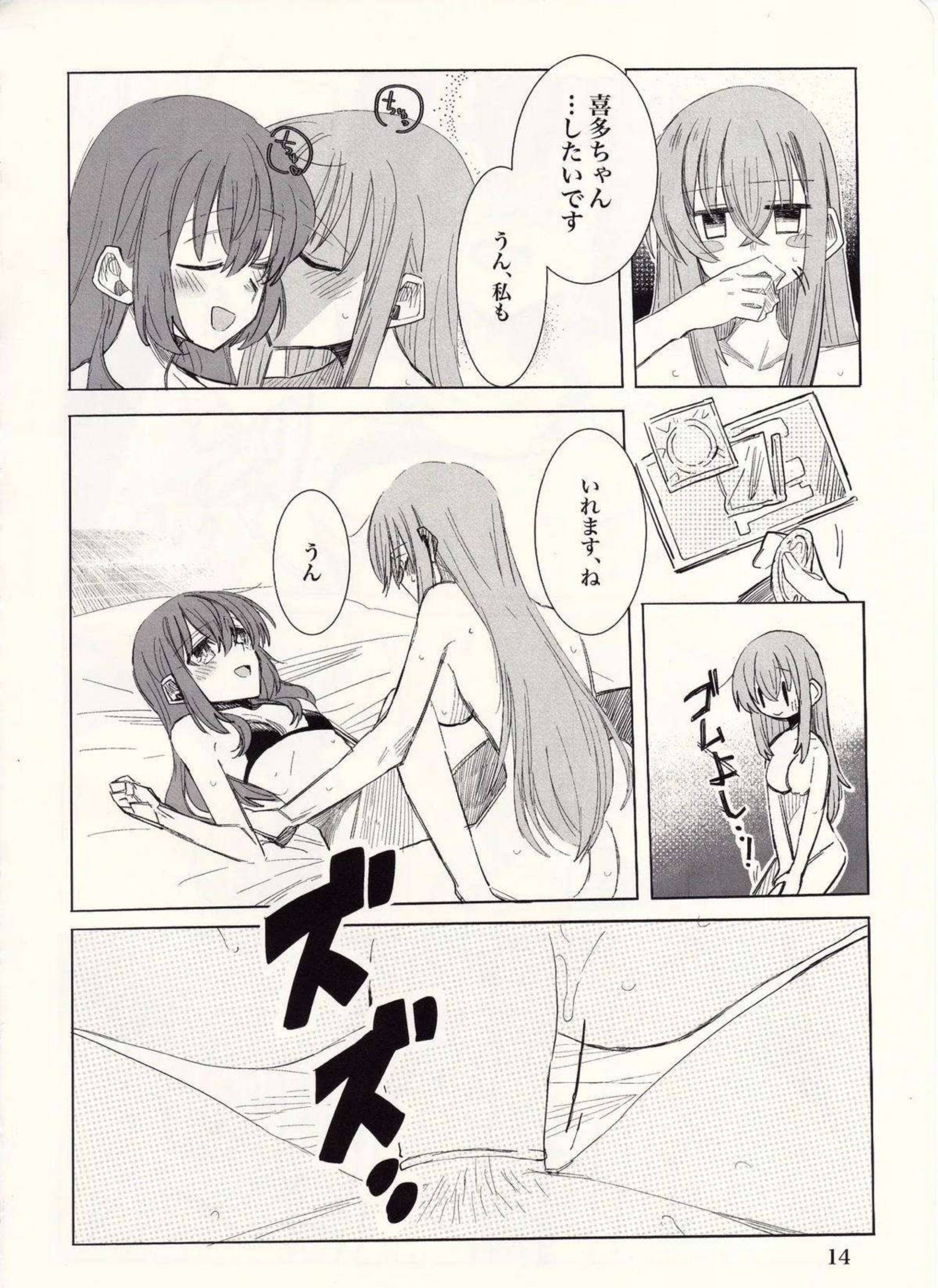
あっ♡

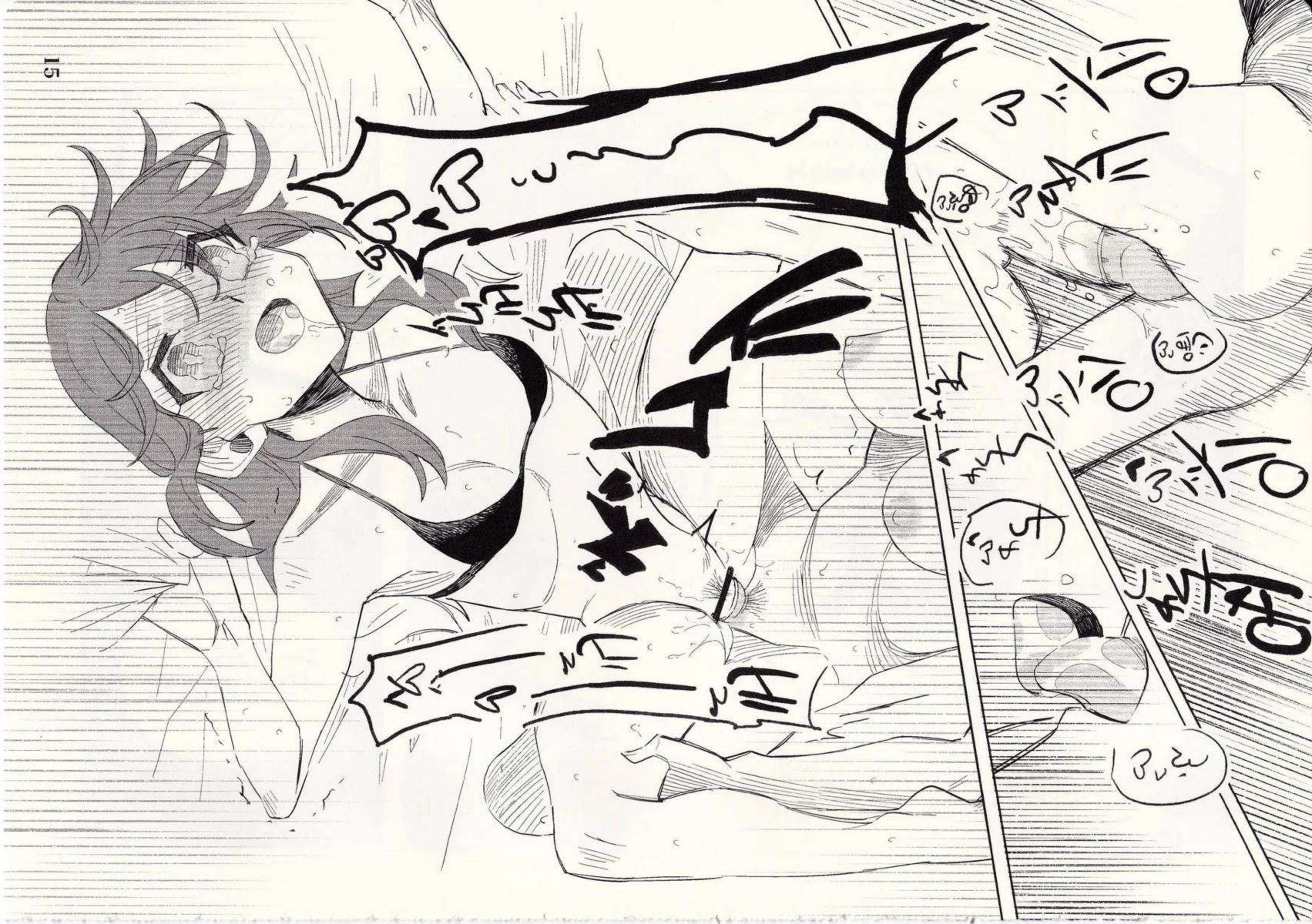
ぎゅっ

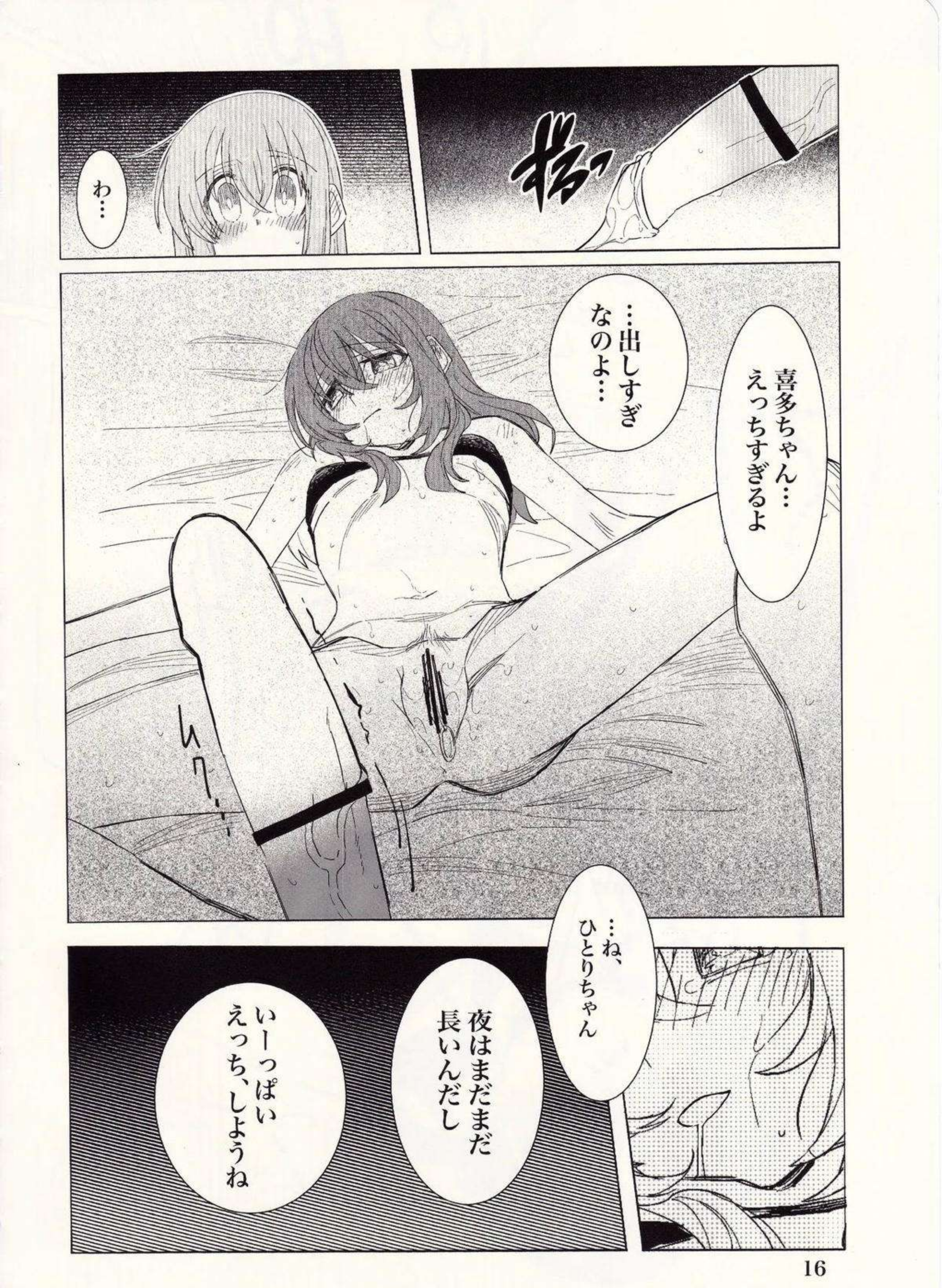
……もうっ♡

もみもみ

ぎゅぎゅぎゅ


喜多ちゃん…したいです
うん、私も
ちゅ
ちゅ
いれます、ね
うん
ゴムよし…！
ズズズ


ドンッ
ドンッ
ドンッ


わ…
喜多ちゃん…えっちすぎるよ
…出しすぎなのよ…
…ね、ひとりちゃん
夜はまだまだ長いんだし
いーっぱいえっち、しようね

tsw@tsw74194938

「ひとりちゃん」と、私の下から声がした。

「ねえ。週末、お泊まりに行ってもいい？」

喜多ちゃんにそう聞かれると私はいつも緊張する。それでもすぐに「あっはい」と答えると、喜多ちゃんは嬉しそうに私にとん、と肩を寄せた。その拍子に指先が触れ合って、だんだんと絡まっていって、最終的に私たちはしっかりと手を繋ぎながら歩いて帰った。

薄暗い私の部屋の、布団の中。私の真下にいる喜多ちゃんの顔に手のひらを当てて撫でてみる。頬の上にぴったりと張り付いている髪を指先で脇に払う。もう一度「ひとりちゃん」と縋るような声が聞こえて、私はそれに応えるように徐々に体を下ろしていった。すっかり汗でベタついた素肌同士がいくら触れ合っても不快にならない。むしろもっと、ずっと密着するように私が裸体を押し付けると、喜多ちゃんも私の背中に腕を回してぎゅっと抱きついてきてくれる。

喜多ちゃんの唇の上に、私の唇を重ねていく。舌先で湿らせながらその表面を這い回ると、たまに、喜多ちゃんがお返しみたいに私の唇に吸い付いてくる。やがて喜多ちゃんは私の首に腕を回して、私のことを味わうように丹念に口を動かし始めた。喜多ちゃんの熱い舌がぬるりと口内に侵入してきて、舌と舌を絡める合間に「ん、ふぁ」なんて喜多ちゃんの艶やかな声が漏れて、私は頭の奥がパチパチ爆ぜる。

いつからか、週末のお泊まりではこういうことになるのがほとんどお決まりみたいになっていた。昼間は至って普通に過ごして、夜になったら隣同士に布団を敷く。最初は普通に寝る前のお喋りをしているんだけど、いつの間にか、どちらからともなく布団の境界線を超えてしまう。布団の中でパジャマ越しに体に触れ合うとドキドキして、至近距離で見つめ合うとだんだんと顔が近づいていった。そうして鼻先が擦れた後に、一度、軽く唇を押し付け合ったら、それで私達はお互いに何らかのスイッチが入る。

「あっ、んぅ……んっ」

顔を離して腰のあたりに力を込めると、喜多ちゃんが恥ずかしいのか気持ちが良いのか、判別のつかない声を上げた。同時に、私の下腹部あたりに言いようのない快感が走る。

普通の女性にはないモノが私には生えていて、それで喜多ちゃんに嫌われるんじゃないかって、最初の頃は不安だった。喜多ちゃんのことをそういう目で見てしまう自分のことも嫌だった。私はただ、喜多ちゃんの隣に居られるだけでも幸せなのに。喜多ちゃんのことが大好きで、傷つけたくなくて、でも、どうしても触れ合いたいと思ってしまって、結局、私は喜多ちゃんに手を引かれるように体を重ねた。

初めてしようとした時に「好きだから、こういうことをしたいと思うのよ」って、そんなことを言われてしまって。その時の喜多ちゃんの表情は少し寂しそうだった。喜多ちゃんも私のことが大好きで、そういうことにも興味があって、私と同じ気持ちなんだ、って、その時になって、私はようやく気づいたんだ。

「あっ…ひとり、ちゃん、ぁ、うっ」
喜多ちゃんがぎゅうっと顔を顰めた。私は喜多ちゃんの細い足の間に入って何度も腰を前後に動かしている。喜多ちゃんの色っぽい表情と繰り返しやってくる快感に、息が荒く、速くなる。
「き、喜多、ちゃんっ。っ、はぁっ、……気持ち、良いですか？」
「んぅっ、ぁ……きもち、いいっ、きもち、いいよ？」
例え行為の最中でも、私が聞くと、喜多ちゃんは優しい声色でそんな風に答えてくれる。その表情を伺うように私が顔を近づけると、喜多ちゃんは私の口元を目掛けて食むような口付けをした。上唇と下唇を順番に啄んでから、柔らかい唇全体をやや強引に押し付けてくる。
「っ…すきっ、すきよ、ひとり、ちゃん…すき……だいすきっ」
私の頬に手をやって、息を切らしながら懸命に伝えてくれる。そんな喜多ちゃんが愛おしくて、そう言ってくれるのが嬉しくて、私は胸の奥が気持ちよさとは別の何かでじんわりと満たされていった。
「あっ、わ、私も、好きですっ、喜多ちゃん、大好きですっ」
「うんっ……もっと、して、ひとりちゃんっ。もっと、気持ちよく、なって……！ぁ、ん、ああっ」
私が起き上がって姿勢を変えると、喜多ちゃんの声が大きくなった。抽挿を繰り返す結合部からの水音と肉同士がぶつかる音、喜多ちゃんの嬌声が寝室に響く。私は喜多ちゃんの足を抱えて動く速度を上げていく。快楽の波に飲まれそうになりながら、私の中に沸々と邪な気持ちが湧いてくる。喜多ちゃん、可愛い。もっと喜多ちゃんの乱れる姿が見たい。たくさん気持ち良くなって欲しい。

そんな劣情を吐き出すように動いていると、その内「ぁ、んっ！」と喜多ちゃんが力強く私の腕を握ってきて、がくんっ、がくんっ、とその体が二、三回ほど痙攣する。そうなったら、私はほんのちょっとだけ動きを休める。深く交わる口付けをして、互いの体に触れ合って、何度も愛を囁き合って、そうしてまた、行為に耽る。いつの日か抱えていたはずの不安感も、羞恥心も、気持ち良くなるのに邪魔なものは、きっともうお互いにどこか遠くに置いてきてしまった。
「ぅあ、……っは、ん、喜多ちゃんっ、きた、ちゃんっ」
「ぁ、ま、って、やだ、これ、ん、うっ」
喜多ちゃんが腕を突き出して私のお腹の辺りを押す。私はそれに構わずぐっと深く腰を沈める。「やだ」って言ってもやめないで、って恥ずかしそうに教えてくれたのは喜多ちゃんだ。喜多ちゃんの腰を引き寄せながら自分のモノを押し付けるように動かすと、観念したかのように手の力が緩んでいって、シーツの上にぱたんと落ちた。
幾筋も汗が滲んだ喜多ちゃんの細い体。髪は乱れて、また毛束がいくつも顔に張り付いている。頬から耳まで真っ赤にして、何かを乞うような瞳を私に向けて、私が腰を打ちつける度に悩ましい声で何度も喘ぐ。そんな喜多ちゃんを見ていると、しまいには、愛とか、幸せとか、快感とか、興奮とか、そういうのが全部ごちゃごちゃに混ざり合って、何が何だかわからなくなる。ただただ今はこの快楽に溺れていたい、って、そんなことばかりを考えるようになってしまう。
「きたちゃん、っ、わ、私、わたし、」
快感が背筋を伝って登ってくる。頭の中がぼうっとする。

「……っ、ん、ぁ、ひとりちゃん、ひとり、ちゃんっ」
喜多ちゃんの足が私の腰にまとわりつく。何かに突き動かされるように私の腰の動きが速まっていく。肉同士がぶつかる音も激しさを増していく。喜多ちゃんの声が大きくなる。荒々しく呼吸をしていると、やがて「き、たちゃん」なんて情けない声が口から漏れた。
瞬間、私の頭の中で何かが激しく明滅して、一つ大きな身震いが起きる。同時に、一気に全身の力が抜けて、くらくらと眩暈がした。私は呻きながら体を曲げて、倒れ込みそうになった体を何とか支える。
頭の中がぼんやりとして、それからしばらく、私はただただ荒い呼吸を重ねることしかできなくなる。それは喜多ちゃんも一緒だった。お互いにぐったりとして、ゆっくりと息を整える。喜多ちゃんの固い指先が私の首筋を登っていって、頬に触れて、それで少し安心した。
そのまま薄暗い寝室に、二人分の呼吸音だけがしばらく聞こえた。

＊＊＊

寝転がると、微睡んだような表情をしている喜多ちゃんと目が合った。私はそんな喜多ちゃんの頬に、恐る恐る、そっと触れる。
「……あっ、きっ喜多ちゃん。その……大丈夫、ですか」
「……なあに、それ？」喜多ちゃんがくすりと笑う。「大丈夫よ」
喜多ちゃんの温かい手のひらが、私の手の甲の上に優しく重なる。それから、喜多ちゃんは私の手のひらを自分の頬に押しつけて、幸せそうに頬擦りをした。

「あっ、その、痛く、しちゃったりとか……」
「……散々滅茶苦茶にしておいて、今更それ？」
「うぐっ！すす、すみませ、」
「冗談よ」喜多ちゃんは悪戯っぽく微笑んでいる。「ひとりちゃんが求めてくれるようになって、嬉しいもの」
喜多ちゃんの腕が伸びてきて、私の首の後ろにかかる。こっちに来て、の合図だった。私はそれに促されるまま喜多ちゃんの布団に潜っていって、同じ枕の上に頭を乗せる。喜多ちゃんはしっとり濡れた唇を軽く私の口に押し付けてから、一言、「あいしてる」と言った。
幸せなことだと思う。好きな人に愛してるって言ってもらえることも。ああして体を重ねることを幸せだと思えることも。
「……喜多ちゃん」
「うん？なあに」
すぐ目の前に喜多ちゃんの顔があって、その大きくて丸い瞳が私をじっと見つめてる。あれだけのことをした後なのに、ただそれだけで、几帳面にも、また胸がドキドキしてくる。
「あっ愛してます」
そう言って、私は喜多ちゃんにそっと口付けを返した。
初めて体を重ねようとした時も、今も、私たちはきっと、変わらず同じ気持ちなんだ。お互いに大切にしているこの気持ちが、どうかこれから先も、ずっと、変わることがありませんように。
私は願いを込めながら長い間口付ける。喜多ちゃんはそんな私に応えるように、布団の中で私の手を、優しく、強く、ぎゅっと握った。

はーい
はーい
ひとりちゃん本当にち●ぽでかいのね…
すみません…
どっ
どっ
どっ
どっ
うわ…ぁ すご…
これほんとに挿れちゃうの？
でできたら…
はーっ
ぶっ
きゃ
ん…
うわー…❤

ど…
どうしよう…
喜多先輩へ
短い間ですが
同じクラスで
楽しかったです

これで
ひとりちゃんが
留年とか退学
しちゃったら…
なんとかして
やる気に
なって
もらうには…

ムチとアメよ！
ひとりちゃん
どう？
気持ちいい？
うっ
あっはい
気持ちいい…
ですっ！
ズチュッ
ズチュッ
ズチュッ
ズチュッ
ズチュッ

でもひとりちゃん
今こんな事してる
場合じゃ
ないものね
えっ
ズルッ
こういうの
もう今日で
最後に
しましょう
えっ
けど　もし
合格できたら
ひとりちゃんの
好きにして
いいよ…？

ブブブブブブ!!
喜多ちゃんっ!
喜多ちゃんっ!
ひとりちゃん…っ
ちょ…待っ…
パッ
パッ
パッ
パッ
パッ
また
イッちゃうッ!!
ビクッ
ビクッ

あとがき

おはこんばにちは、mirumiruです
ぼざろの本2冊目となります。

前回の引き続きをふんわり程度匂わせました。
初めての初夜を越えて、恋人として意識してからの彼女達も
描きたいなーということでほぼえろシーンだけになりました。
恋人だからって雰囲気にのまれて着ちゃうの気をつけた方がいいと思うな…。

間に合っていたらもう1冊コピ本がきっと出てます
またぼざろ以外にも別ジャンルも余裕あればそのうちかきたいな
それでは

2023／10／14／ 東京文具共和会館
ぼっち・ざ・おんりー！#2

印刷所 おたクラブ様

サークル:mirumiru libraly
P.N. :mirumiru

最高のゲスト様方(敬称略)

tsw (@tsw74194938)
賀　(@gummy1024)
mototenn (@08b06)

※無断転載、複製、複写、Web掲載、転売は禁止です。

ぼっち・ざ・ろっく！

fan book